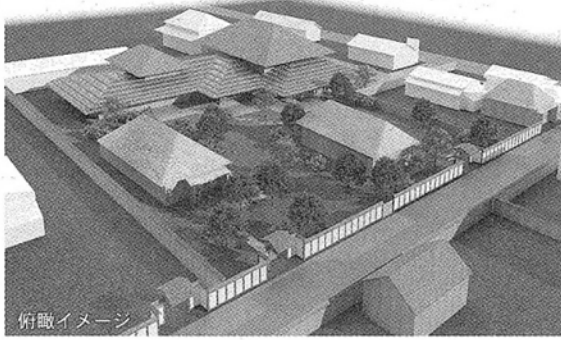


実物大の模型で設計意図を具現化



俯瞰イメージ

新登米懐古館新築工事 (宮城県登米市)

設計 = 隈研吾建築都市設計事務所
建築 = 渡辺土建(宮城県登米市)

各所に地元産材を採用

仙台伊達藩の一門として13代・約300年にわたり2万1000石の城下町だった「登米町」(宮城県登米市)。町内には藩政時代の武家屋敷や史跡に加え、明治期の重厚な建物が残っており、「みやぎの明治村」とも称される。その主要施設である登米懐古館の建て替えが現在、佳境を迎えている。世界的な建築家の設計意図を具現化するため、実物大の模型を作成するなどの工夫を凝らしながら、地域のシンボルとなる建物の施工に挑む現場取材した。

登米懐古館は、旧登米町名誉町民である渡邊政人氏の寄付を受け、登米伊達氏ゆかりの文化財などを保管展示する施設として1961年に開館。築後50年以上経過し、文化財の保管公開施設として老朽化が著しく利用が困難となったため、登米市が建て替えを決めた。施工場所は登米市登米町寺池桜小路地内の敷地22



屋根垂木として地元産の木製ジョイストを使用

52平方メートルで、規模はRC一部S・W造2階建て、延べ824.60平方メートル。施設内にはエントランスゾーン、管理・収蔵ゾーン、展示ゾーン、廊下、トイレなどを配置する。設計は隈研吾建築都市設計事務所が手掛け、工事は渡辺土建、亀井電気、旭洋設備工業、イシケン、丹青社が担当している。

世界的な建築家である隈氏が木材などによる「和」や「自然」をイメージしたデザインを得意とすることから、今回の建物にも登米市産材が数多く採用されている。2階屋根に登米市産のスレートを使用するほか、外壁には登米市産の杉を使った落とし板を張り、屋根垂木として木製ジョイストが外観、内観ともに目を引くような造りとした。内壁は地元土を使用した土

壁塗り、床は洗い出しとするなど、RC造でありながら木の温もりを感じられる施設となる。また、1階屋根に約700枚の緑化パネルを施すことで、庭園からの緑のつながりを生み出し、施設全体が地域の自然と調和することを目指している。

施工に当たって、まず現場が直面したのは「設計の意図を実際の建物に落とし込むことの難しさ」だ。現場所長を務める渡辺土建建築部の及川英樹工事長は「RC造、S造、W造が交わった建物であることが施工難度を高くしている。また、異なる屋根勾配が交わる部分などは詳細に施工図を作成して取り組んでいるが、読み切れない部分もある」とその苦労を語る。こうした課題の解決に向けて、工事エリア内に1階部



原寸大のモックアップ

分、2階部分それぞれ実物大のモックアップ(模型)を作成した。これを使って部材・部位の納まり、仕上げなどを検討したところ、「予想が付かない点の洗い出しなどが可能となり、施工に反映することができた」という。



及川所長

取材した3月15日時点で建築工事の進捗率は75%。25人の職人が床、天井、内壁の下地づくりなどを行っていた。3月18日からは懸案となっていた屋根工事も着手し、5月末までの工期内完成を目指す。フルオープンには9月を見込んでいる。及川所長は「登米市の地元業者として、登米伊達家ゆかりの品々や歴史的価値の高い文化財を展示収蔵する施設の建設に携わることができるとは大変ありがた

強調する。「登米(とよま)は、私たちの『家』である」。これを遺訓の一つとして残すなど地元を愛した名士・渡邊政人氏が寄贈した登米懐古館が、世界的な建築家と地元企業の手で生まれ変わり、地元のシンボルとして地域住民や観光客に披露される日まで、現場一丸となった作業が続いていく。

建設新聞

2019年3月22日(金)
掲載